

御国を来らせたまえ

主がその弟子たちに教えられた「主の祈り」の第2の祈願は「御国を来らせたまえ」である。

御国とは、神の国又は天の国と呼ばれ、第1義的には、キリスト再臨時に完成される栄光の神の国をいう。キリスト者は、救い主キリストが栄光のうちに審判者として再臨され、神の国を完成されることを知っている。その日は「主の日」と呼ばれ、サタンは滅ぼされ（マタイ 25：41）、キリストにある死者は朽ちない体によみがえらされ（第1コリント 15：42～50）、もはや死ぬことなく（ルカ 20：35、36）、キリストと共に神の国を継ぐであろう、と約束されている（第1コリント 15：50）。

神の恵みによってエジプトの奴隷状態から贖われた旧約の民イスラエルが約束の地カナンをはるか前方に見つつ信仰をもって生きたように、キリスト者も、やがて来るべき神の国の栄光を遙かに彼方に見つつ、罪と不義のはびこるこの世界のただ中で苦悩しながらも希望をもって生きる。神がその御国を一日も早く実現させて下さるよう祈りつつ生きる。

しかし、キリスト者は、ただ単に、はるかかなたに存在するものを手をこまねいて期待しているのではない。神の国とは、単に未来の国として期待されているというだけではなく、今すでに、ここに存在する神の支配のことも意味する。「御国」と訳されている語バシレイアは、場所や領域よりも、むしろ支配と統治を意味する言葉である。主イエスは、この世の終わりに栄光をもって到来する神の国が、ご自身の人格と使命において、歴史の中にすでに到来した、と繰り返し言明された（マタイ 12：28、ルカ 17：21）。

神の国（バシレイア）は、イエス・キリストの到来において歴史のただ中に開始された。キリストの十字架と復活は、歴史のただ中に表された神の力の顕著な証拠であった。そして、その神の支配とその力は、今、教会を通して、また信じる者たちのただ中に、キリストの御霊によって、働いているというのが新約聖書の教えである。

教会およびキリスト者とは、この「神の支配」（バシレイア）のもとに生きる人々の群れのことである。教会の礼拝とは、やがて来るべき神の国の祝宴の、この歴史における先取りであり、キリスト者の生活とは、神の国において神と共に生きることの、この世における前味わいである。すでに、この地上において神の国は教会の礼拝において、またキリスト者の生活において始まっている。キリストが臨在されるところ、そこに神の国（バシレイア）があるのである。

「御国を来らせたまえ」という祈りは、終わりの日に実現する神の国を待望する祈りであるとともに、今この時に、私たちが、この世のさまざまな状況の中で、神の働かれることを期待し、神の力と支配に一切の望みと信頼を置いて生きる、キリスト者の祈りなのである。

罪と不義の支配するこの世界において苦悩しつつ生きながらも、私たちは神の恵みの支配を信じ、神が、私たちの日々直面する困難な状況の中で、ご自身の力を現してくださるよう、神がご自身の教会を維持され、その宣教の働きを力強く進めてくださるよう、こうして、御国の完成へと導いてくださるよう、と祈りつつ生きるのである。